

## 日本研究と社会科学—インドにおける日本研究の現状から

ランジャンナ・ムコパディヤヤー

◎ランジャンナ 再び日文研に来て、本当にうれしく思います。所長の小松先生と磯前先生にお礼を申し上げたいと思います。2人の、フランスの事例やベトナムの大変おもしろい事例報告の後に、私が紹介するインドの事例はちょっと地味な発表になってしまうと思いますけれども、どうぞよろしくお願いします。

直接本題に入りますけれども、日本研究と言ってもそんなに新しい研究分野ではありません。学問としては新しいのですが、以前から、2つの大きな流れがあります。1つは、地域研究の1つの分野としての日本研究、そこで日本の政治とか経済とか社会などを研究することなのですけれども、まだそこは地域研究としても東アジア研究の一環として日本研究が位置づけられることが多いのです。つまり、アジア諸国の中の中国、韓国と北朝鮮、台湾などとともに日本の研究を行うということなのです。

また、もう1つの流れは、外国語としての日本研究ということなのです。つまり、日本語を勉強して、そこから日本に関心を持って、日本の研究に取り組む、そういう2つの大きな流れがあります。

日本の研究の始まりは、明治維新の後ですね。アジアの国として日本が近代化、産業化を果たす一方で、同時にイギリスの植民地だったインドの知識人がそれに注目することになります。そこで、インドのそういう有力な方々と知識人が日本を訪問することになるのですけれども、1889年に、後でタタの財閥の創立者になるジャムシェトジー・タタをはじめ、産業界の人々が日本を訪問し、日本の事情についていろいろなことを書くのです。そこで今、記録として残っているのは、この2人の方の研究です。

1つは、インドの著名な土木技術者であったモークシャグンダム・ヴィシュヴェーシュヴァライヤが日本を訪問し、彼が書いた *Reconstructing India* (『インドの再建』) と *Planned Economy of India* (『インドの計画的経済』) はインドについて書いているが、その本のなかで日本の事情そして日本の近代化についても書いているのです。またサイド・ロース・マスードは、1922年に日本を訪問して、*Japan and its Education System* (『日本とその教育制度』) をあらわしました。そこで日本の教育制度が日本の近代化にどういう貢献をしたか、それについて書いています。

その後は、もう少し本格的に、岡倉天心が1902年にインドを訪問し、そこでノーベル賞を受賞したタゴールといろいろな交流して、タゴールが設立したヴィシュヴァ・バーラティ大学で最初に日本語の講座が始まります。

そこで、日本から研究者とかいろいろな人が入ってくるのです。インドへ初めて留学するその先駆者たちは、まずここへ来ました。そして講師にもなります。当時、タゴールが1916年に日本を訪問して、「ナショナリズム・イン・ジャパン」という日本への批判を含む『国家主義』という本を出しています。そういうふうには1929年から、いろい

るな日本からの学者とか芸術家などによる日本研究とか日本文化の講座が行われます。

その後、第二次世界大戦が始まると、そういう日本からの人々がインドに来られなくなって、一時停止されるのですけれども、インド独立後に、インドと日本の間の国際関係ができるし、また文化交流の協定もあるから、そこから日本の政府、文部省の支援で、インドから日本にどんどん留学生が送られるとか、また、そういう研究が始まるのです。

今、地域研究としては、インドで主に2つの大学でしか研究が行われていないです。1つはデリー大学です。もう1つは日文研で客員として招かれたアブラハム・ジョージ先生が所属するネルー大学です。デリー大学では1964年に中国研究のセンターとして始まるのですけれども、その後、日本学も加えられるのですが、また2002年に韓国学も加えて、それが今に至るまで、Department of East Asian Studies、つまり東アジア研究科になるのです。また、大学院の中では修士課程とか博士課程とか、いろいろな課程があります。

もう1つのネルー大学では、地域研究は国際関係をメインにして、Center of East Asian Studiesの中でやられているけれども、またもう1つはCenter of Japanese Studiesがあって、そこで日本語と日本文化の研究が行われています。それ以外に、日本語とか日本文学の研究、タゴールが設立したヴィシュヴァ・バーラティ大学をはじめいろいろあります。これの研究分野としてはやはり国際関係が一番多くて、その他は経済とか歴史になります。

ここから、日本の研究と社会科学とのどういう関係があるのか、特に我々がインドで日本研究をやるとき、どういう問題意識を持っているのか、また、ほかの専門分野とどうかかわっているのかということが一番重要なことだと思います。例えば私は修士課程まで社会学をやっていたのです。その後私は、社会学科から日本学科に入り、そこで日本語を勉強して、東京大学に留学しました。東京大学で宗教学を専攻しましたが、そもそも私がベースにしてきた専門分野といえば、社会学なのです。それは日本と関係ない単純な社会学なのですけれども、同じように、ほとんどインドの場合は歴史学とか政治学とか国際関係という、さまざまな分野の人が日本学に入ってきます。つまり、自分の専門分野の問題意識や理論とか、そういう観点から日本を見たり日本の研究に接近してきます。

ちょうど私が入ったときもまだ有力な議論だったのは、やはり日本人論という議論です。それは戦前もそういう研究があったのですけれども、日本人の民衆的な特徴性を主張する諸理論のことであるとか、日本の文化とか社会的な要素がユニークな現象であるという議論です。しかし、これはさまざまな問題を起こしてしまったのです。それはやはりそれぞれの分野で育ってきた人なので、日本が特徴的であるという立場からは研究ができなかったことです。

そこで、私は昔、ある学会で言われたのは、日本の研究はビジネスクラスであると。特別に扱わなければならないという見方があるのです。それは例えば戦前のベネディクトとか、オイゲン・ヘリゲルの研究とか、戦後になるとハルミ・ベフとか、吉野耕作の

文化ナショナリズムの研究です。それが西洋でも日本でも同じような見方で研究されてきたことがあるが、やはりインドにいる我々の研究にとってちょっと問題になることがあります。その1つは、日本研究がそういう日本人論とか独自の議論を出していたころは、割と独自の発展ができたのですけれども、一方、地域研究とか社会科学のほかの研究分野から孤立してしまったという結果もあります。それが、インドで日本の研究者が少ない理由の1つなのですから、やはりみんながそれぞれの分野の見方とか、それを大事にしていきたいし、そこから日本に接近したい。そこで、相手の研究者がもしそういう議論を受け入れないとか、そういう議論から離れてしまうと、それが1つの大きな問題になってくるのです。

ここで、事例として、私は日本の宗教、特に仏教を研究してきた者なのですが、特に明治維新の後、日本の仏教が近代化にどのように対応したのか、それが私の研究のテーマなのです。インドでも日本でも宗教の研究が非常に盛んなのです。その中で最も盛んなのは、1つは仏教の研究、もう1つは新宗教の研究です。でも、日本の研究者とインドの研究者の間に、その2つの分野ではほとんど交流がない。例えば東大でお世話になった島菌進先生や、それ以外の先生が、日本の新宗教の研究をやっています。同じような新宗教の研究はインドにもあるのですけれども、でも、インドの新宗教の研究論集を取ってみれば、島菌先生や他の日本の先生の研究にはあまり引用されていないのです。それが1つの大きな問題なのです。

不思議なことに、問題意識は同じなのです。例えば、宗教と国家とか宗教的ナショナリズムの問題は、今でもインドで非常に議論されていることなのです。もう1つ、宗教をどうとらえるかということも大きな課題でしたが、あまりその辺でも交流がないし、どこの国でも文化と民族的なアイデンティティーの問題、それが一番みんなの議論するところなのです。それが接点になるはずなのですが、今のところインドと日本の場合はそれが接点になっていないということです。

私は2015年から日印関係における仏教というプロジェクトにかかわっているのですが、明治維新の後に日本の各宗派が、鎖国の時代が終わったから、いろんな使節団やインドに巡礼に行くようになるのです。それで、インドへの訪問とかインドの巡礼研究、特に仏跡巡回の研究が、日本の近代仏教の中ですごく大事な研究分野なのです。

日本の仏教者や僧侶たちがインドに行って、日記を書いたりや、いろんな資料を集めたりするのですけれども、その後に日本の研究者がその資料を使って研究するのです。そこで、大きく見過ごされてしまったことは、インド側の研究なのです。日本の方々もインドに行っていることが、インド側でもそれについて何か記述があるはずなのです。でも、ほとんどそういう資料の扱いが日本の研究の中で見られない。日本の近代仏教の研究の中でも見られない。

そこで、我々がやっている研究は、これは日本の学術振興会とインドのICHRという歴史研究のために支援している政府の組織団体なのですが、初めて日本の研究のために、特に日本の仏教研究のために助成金を出したのです。やはりそれだけ日本の仏

教を研究する価値があるのです。

この研究で、私が調査したいことは 1930 年代に日本の巡礼者がインドへやってくると、やはりイギリスがそれを監視していました。イギリスはそれをスパイ活動ではないかと監視していました。そのような資料は、例えば British library (ロンドンにある英国図書館) に保蔵されています。この日印共同研究では、我々がそのような資料を発見しようとしたのです。だから、それは全く違う観点から日本の研究をするという試みなのです。このような日本研究は、日本語の資料とか日本でしか見られない資料に頼らずに、海外の資料に基づいて日本仏教を研究しようという国際化とか学際化、さっきの論文に出てきた言葉なのですけれども、それをやろうとしているところです。

もう 1 つは日本語の問題なのですが、外国語としてインドでは日本語の人気があるのです。それは日本からいろんな企業がどんどんインドに進出していることで、結構仕事が多いから人気があるのですけれども、日本研究のための日本語力がやはり足りないのです。それで一番起こってしまう問題が、欧米の資料とか欧米の研究者の日本研究に頼ってしまうことなのです。それは、日本人の研究者による外国語での研究報告が少ないことなのですが、その結果として、欧米の日本研究に見られる偏見とか偏りがインドの研究にもあらわれてしまう。それが一番今、我々が見ているところなのです。やはりそれが日本の研究者による外国語での研究報告が重要であるということです。

もう 1 つの言いたいことは、地域研究としての日本研究についてです。地域研究として戦前では植民地の歴史とか、また、戦後になると国際協力、国際関係、地学や経済の視点からいろいろ研究があるのですけれども、問題はそこで東アジア研究といって、中国学、日本学と韓国学があるのですが、これらの学問分野の研究がそれぞれ独立的に行われてきています。つまり、1 つの研究分野の課題とか方法論について、中国をどう調査するのか、日本をどう研究するのか、日本の研究者が中国をどう研究するか、また、中国の研究者が日本をどう研究しているか、そういうところの交流があまりないのです。まだ、インドの場合は、欧米の研究者の日本研究がよく知られているのですけれども、アジアの研究者による日本研究がほとんど知られていない、それも問題です。

今、日本研究のもう 1 つの問題は、1970 年代までは日本研究がすごく盛んだったけれども、その後は中国研究と韓国研究がだんだん盛んになってきているし、日本研究の学生はそんなに減っていないけれども、最初は日本を研究して、後で中国研究に入ってしまうことがあります。このようにほかの学科との競争があることが、難しいところです。

それで、どのように日本研究を取り上げるのか。そこで最近インドでよく話されているのは、オルタナティブ・モダニティのことなのです。オルタナティブな近代化、つまり、アジアの近代化というのは、西洋の近代化と異なる現象であったということです。そこでよく事例として、インドとか日本が取り上げられています。そのために最近、日本が注目されてきている。それが、近代化やポストモダニティの研究の中で日本が取り上げられる大きな理由なのです。

文化ナショナリズムの研究があるのですけれども、そこから最近ソフトパワーの研究がすごく盛んになって、特に大衆文化の研究の中で、文化の特殊性と、その文化のグローバル化、つまり国際的にどう展開しているのか、どう受け入れられているのか、それがソフトパワーの研究の大きなところなのです。

最近になると、インドの中で、今までの仏教史研究は、経典に遡る研究がほとんどだったのですが、ソフトパワーとして仏教を利用することも探られだしています。それは海外にどう受け入れられるか、対外的にどう展開できるかということが、インドでも盛んに論じられ、それが1つの研究分野になっているのです。だから、今、1970年代の日本人論的な研究が、だんだんそういうソフトパワーの研究の中でどう入り込んでいけるかということが、もしかするとこれからのすごくおもしろい研究分野になると思います。

あまり長くならないように、最後にまとめたいと思います。やはり日本学と社会科学の諸分野とをどう関係づけるのかや社会科学に日本研究がどう貢献できるのかが大きな課題なのですけれども、そこでそれぞれの分野の問題意識や議論の観点が、日本研究の場合どう受け取られるか、どう採用されるか、それが重要な課題になります。

そこから続いて、また地域研究として、今特にグローバル化の時代において、1つの国を独自の国として取り扱うことができなくなって、その国の影響がその地域にあるし、特に日本の大衆文化とかポピュラーカルチャーの影響が、東アジアとかインドとか南アジアにも見られ、逆に日本もいろんな周りの国の影響を受けているのですけれども、そういう事情の中で日本の研究がどう取り扱われるか、それも1つの課題です。

その次は、やはり語学とか言語の壁なのですけれども、日本語ができない世界の方々に、日本の研究とか、そこで議論されていることをどう伝えられるか、また、そういうダイアログがどのようにできるのか。それを我々があえてインドで意識するようになるのは、本当に人数が少ないからなのです。日本研究をしている人は5人とか6人しか集まらないように非常に人数の少ない研究分野なのです。人気があるのはあるのですけれども、もう少し幅広い研究をやらない限り生き残れないと思います。だから、日本のことばかりではなく、しかも日本の研究の中で議論されていることが、ほかの研究分野とどう接点ができるのか、それが我々が持っている一番大きなチャレンジです。

以上です。短い発表でしたが、どうもありがとうございました。